

ラブコメ主人公は、無数のヒロインの『屍』の上になりたっている。

㊦ 玄冬編 上

「私がキツネうどんだけで飢えているっていうのに、目の前の人間はカツ丼などという富裕層であることを主張している。不公平だわ、人生」

時は昼休み、場所は食堂、俺こと、里谷理人さとやりとは目の前に座る女学生から訳のわからぬ皮肉を言われた。

え？ 何？

食ベにくいと感じてしまつて、箸をつかんでいた手を止める。

女学生ははずるずるとうどんを啜っていた。同時に、俺のカツ丼を嫉妬に燃える瞳で睨んでいる。食ベたいの？

「……何だこれは」

俺がカツ丼を差し出すと女学生は眉をひそめた。

「食ベたいのかと、思つて」

「腹は減つても高楊枝……慰めの施しなど受けつけぬ。……あれか、カツ丼の見返りに私に何を要求するつもりだ。」

金ならば無いぞ……先日UFOキャッチャーという名の貯金箱に

兵糧ひょうりょうの七割を持つていかれてしまったわ。憎い、あのゆるいアームが憎い。ゆるいアームでゆるいキャラを取ろうと書かれたふざけたポップを破り捨ててしまいたい……」

「何もいらぬよ……確か、久川小雪、さんだよな」

「いかにも私が久川さんの家の勉君よ。そういう貴方はアドミラル・トーゴー」

誰だよ。

「全然違うよ。同じクラスの里谷、里谷理人」

俺の差し出したカツ丼からカツを一枚うばうと、久川さんは俺の

ことをじろりと観察した。

「……………」

反応から察するに、久川さんの記憶には俺のことは微塵も無いのだらう。

俺は苦笑しながら更に話しかけた。

「俺が一方的に知っているだけだよ。久川さん、学校じゃ有名だから」

「有名人過ぎて申し訳ないわ。やはり、美人と言うものはつらいわね、どこへ行つても騒がれてしまうわ」

「いや、そうじゃなくて……ほら、普段の変つた行動というか、ストリートに言うとき行つていうか」

「本人の前でそういうこと言うな。私は奇行をしているんじゃない……常に自分に正直に生きていくだけだ……」

「それじゃこの前、走り高跳びのバーの先端に袋を結び付けて屋上で垂らしていたのは？」

「マグロ一本釣りがどんな感触か味わつてみたかったの。あれは少し失敗だったわ、先端につけた荷物が軽すぎて、思ったほどしな

てくれなかつたのよ。次にやるときはもうすこしマグロに近い重さのモノをぶら下げて

みたいわね。まあ、陸上部立ち入り禁止を言い渡されちゃつたのだけど」

「それを世間では奇行と言います」

それから俺は同じようなやりとりを久川さんと交わした。

しばらくして俺より先にキツネうどんを食べ終えた久川さんは立ち上がり、

「カツありがとう。何か困つたことがあればいつでも言うといいわ」

「そ、そうなんだ……ありがとう」

満足したような笑みを浮かべて、トレイを返却口へ持つていった。

食堂で久川さんと会話してから四限目、五限目と過ぎていき、放課後となった。

担任の先生による終礼がこなされたあと、俺は借りた本を返却するために図書室に行った。本を返却し、適当に本を読んでから図書室をはなれ、教室へ戻る。

教室の中、それはいつもとほぼ変わりがない。ただ一つだけ、異物が混ざりこんでいる事を除けば。

その異物は教室の黒板側に置いてある教壇の上に立って謎、の演説をしていた。

「——言うなれば、失敗とは万物のアルケーである。タレース然りへモクレイトス然り、異なる異物を根源と提案してきた彼らですらその根源は失敗を重ねて生みだされたものなのだから——」

「……なにやってるの？ 久川さん」

「宿題忘れの一回や二回を見逃してもらえように学生運動を始めようかと思っていたの。掲げるスローガンは『許せ、そなたは美しい』貴方も参加しないかしら？」

「謹んでお断りします」

そんな学生運動に誰が参加したがるのだろうか。

【玄冬編】下 に続く